

# 「探究」で育む 資質・能力とその評価

「アクションを気にしすぎて自分の好きなようにできなかった」「私の班は大船渡も大船渡ではない所も学べてない気がする…。今思っていることは堤防なんて調べなきゃよかった」

「大船渡学」で探究学習に取り組む生徒たちの振り返りのコメントの一部です。皆さんは何を感じてでしょうか？

新しい学習指導要領において、高校は「総合的な探究の時間」へと進化しました。なぜ高校だけが変わったのでしょうか？そこに込められたメッセージとは何でしょうか？新旧学習指導要領の比較を通じた理解に加え、学習者の視点に立ち、中学・高校を通じた学びの縦の連続線で捉えてみることで、浮かびあがるテーマがあるように思います。

生徒のキャリア発達段階に応じて、特に高校生ともなれば、設定する探究テーマは自己の在り方生き方と大きく関わっていくもの。課題と自身との関係で何度も繰り返し捉え続けてい

くことが求められます。

しかしながら、自ら問いを立てることは決して容易ではないことは、先生方も実感のあることだと思います。どうしてそれが気になるのか？「活動あつて学びなし」ではなく、本物に触れ、本気で知りたい、自分がなんとかしたいと思えるかどうか。問いが「自分ごと化」した生徒たちの学びは、教員の予測を超えて、深く広がりを見せていくのではないのでしょうか。

探究を通じて育んでいく資質・能力とは？問いをどう立て、磨くのか。そして探究活動の評価をどう考えればいいのか？

人生が問題解決の連続であるとするれば、探究に取り組むことが、生徒ひとり一人のキャリアを切り拓く糧となるはずだと思っています。だからこそ今、すべての学校で探究モードへ。前号に続き、本特集がお役に立てれば幸いです。

山下真司(本誌編集長)

